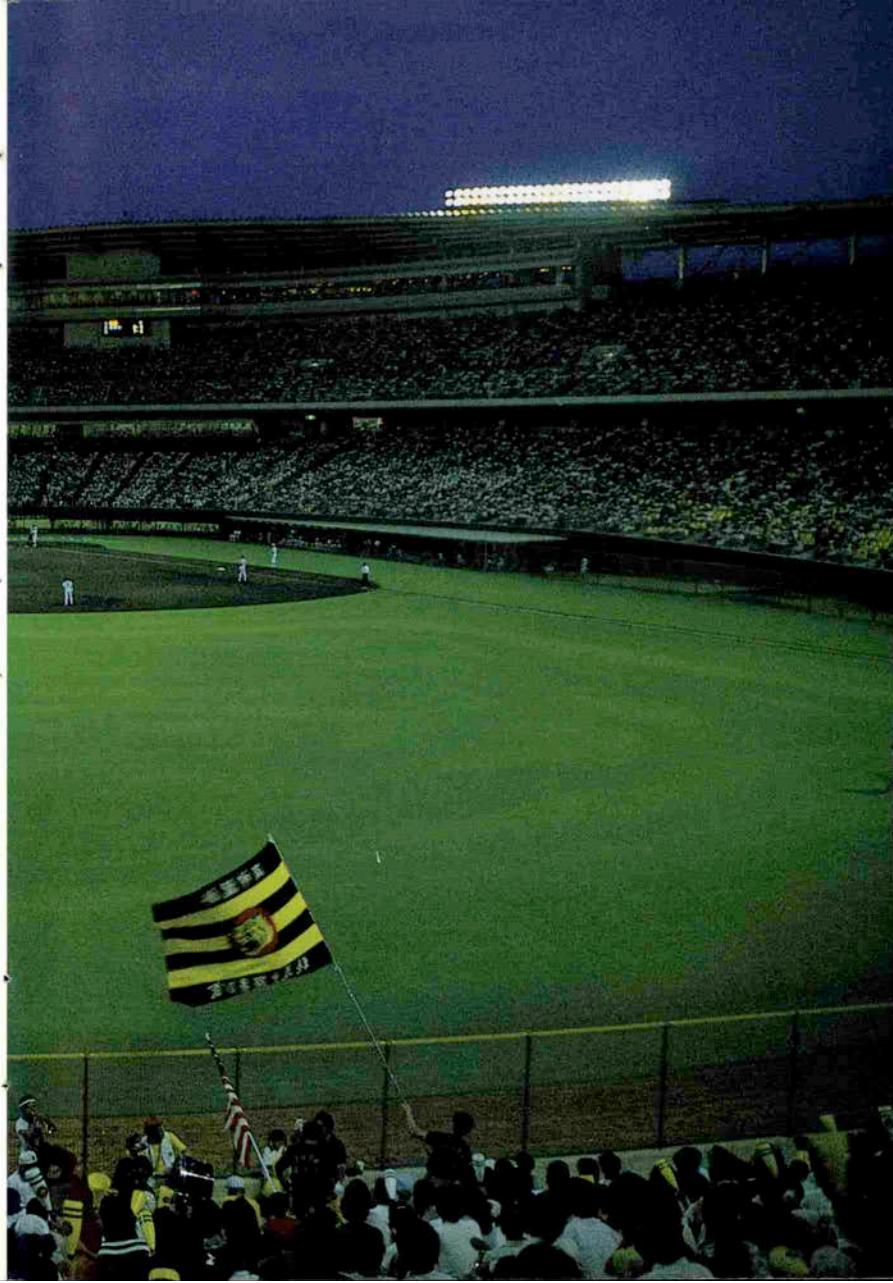


神戸新景

No.
10

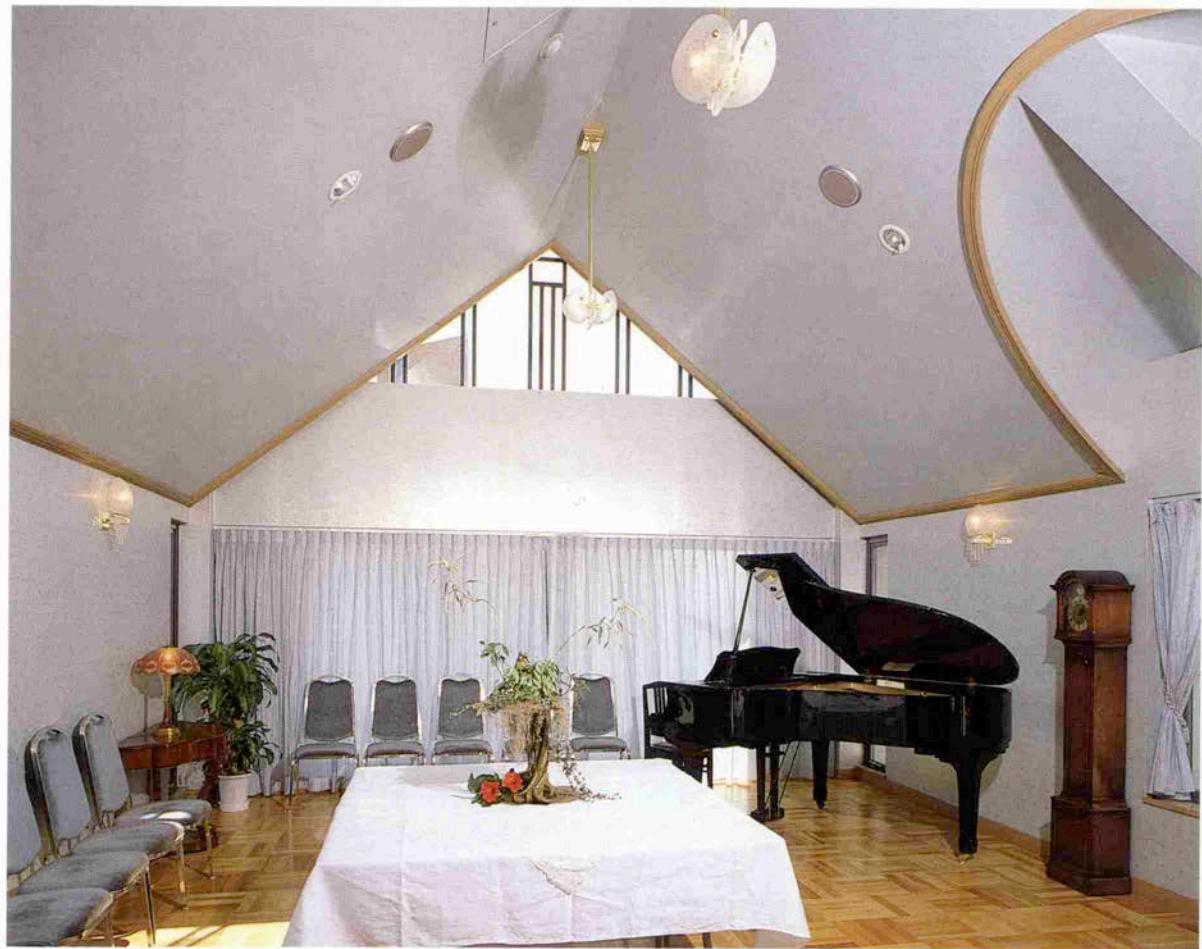
P 小山 保





NISHIMURA FRIEND SALON

御影感覚、新しいカルチャースペース



川西誠治 創作土鈴展より



“にしむら”を愛して下さる方々の集いの場所・フレンドサロン。ブチ・ギャラリー・ダンスホールなど10~20名様迄のグループで使われるのに最適です。あなたのプランに合わせてご自由に演出、ご利用頂けます。なお、飲食のおもちこみはご遠慮下さい。

● 室料 3時間 ¥10,000 ● 営業時間 11:00AM~8:00PM
お問合せは078(854)2106中村まで 11:00PM~8:00PM

フレンドサロン・秋の催し

10/6(木)・7(金)

玉井喜久子 マイニットワーク

10/20(木)~23(土)

井上立子 アートジュエリー展

11/25(木)~27(日)

彫金 スタジオダイネパート3 作品展

にしむら珈琲御影店



豊かな味わい **854-2106**
石焼ステーキみかげ館 **(2・3F)**

にしむら珈琲 **(1F)**
香り高いコーヒーを **854-2105**





ヤ ッ チ し た い 。

(左)印象的な赤と黒。ストールで表情をつけて着こなすのがことです。

- ジバンシィ・ライフ／セーター(毛100%) 29,000円
スカート(毛100%) 29,000円・ベルト10,000円
■3階ハイファッショングル

(右)チェック・オン・チェックにも、ジバンシィならではの知性が香ります。

- ジバンシィ・ヌーベルブティック／アンサンブル ……
(毛100%) 190,000円
■3階ジバンシィ・ヌーベルブティック



DAIMARU KOBE

電話(078)331-8121

パリの粹をキ

磨かれた感性を身につけて、自分を高めていきた
い。そんな、こころからおしゃれな人を、より美しくい
ろどるジバンシイです。シンプルなのに、いまを感じ
させる粹をキラリと光らせている。秋の街角にとど
いたパリのメッセージをうけとめて。それを、美しさ
へのステップにしたもののです。



GIVENCHY
Life

ひと、光る 神戸 でも

御結婚披露宴・

各種パーティー

好評予約受付中



海の見える白いチャペルでウェディング。

海を見ながら、神戸ならではのファッショナブルなブライダルは、恋人たちの夢。
白亜のチャペルに続くホールでのご披露宴や、劇場を利用した世界で初めての
シアターウェディングなど、感動的シーンの演出を心がけています。
カリヨンの音色に祝福されて、慶びもいよいよクライマックスに――。

ゴーフル ポートピア88
神戸 月堂 港島

〒650 神戸市中央区港島中町7-2-2 ☎(078)302-5555

ミナトニ ゴーフル

ポートライナー中埠頭駅前
(ゴーフル白いチャペル前)





カ 186 184 167 162 158 154 152 150 148 146 144 142 140 138 137 136 128 122 121 110 108 92 84 76 74 70 68 60 54

48

43

40 38 36 34 31 29 18 16 15 13 9

10月号目次 ● 1988・No.330

表紙／小磯良平

セカンドカバー／西村功

神戸つ子／西村功

丸山有子／原公一郎

88

9

ある集い／K・F・A／K・F・M

コウベ・ナッブ／東山魁夷展・神戸J.C.30周年記念対談

美の小箱／文・赤根和生・松原政祐

50

9

私の意見／神戸市農政局長・森本祐美

神戸新報／カメラ・小山保

13

13

13

隨想三題／石川晴久・川口陽之・立原麻衣

地域文化論／米花穂美

11

11

11

トランベット片手に／新井満

アーフィッシュ／詩と神戸・杉山平一

12

12

12

石坂春生・藤本ハルミ

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

13

13

13

右近雅大

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

14

14

14

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

15

15

15

15

右近雅大

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

16

16

16

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

17

17

17

17

佐藤晴美

「アーフィッシュ」詩と神戸・杉山平一

18

18

18

話題のひろば／井植文化賞表彰式・新井満芥川賞受賞を祝う会

19

19

19

ファションスポーツ／伊藤ルミの美男対談／神戸商船大学教授・井上和雄

20

20

20

連載小説／「靴」／西本衣江・カット・犬童徹

21

21

21

ネオモーダヘルンPART II／藤原順子／絵と文

22

22

22

ふうたびプロフェッサー／全国健康福祉祭ひょうご大会

23

23

23

経済ポケットジャーナル／吉原ラリー・ホワイトハウス

24

24

24

タウン・神戸ジャズストリート／初田淳

25

25

25

コーヒーブレイク／動物園飼育記／岡田淳

26

26

26

神戸の集いから／有馬辰時記／亀井一成

27

27

27

やあ／神戸つ子／立岡佐智央

28

28

28

K.F.S.ニュース／ネオマ試写室／淀川長治

29

29

29

出会いの旅／玄界灘を越えて・初田淳

30

30

30

神戸を福徳の町に／神戸リハビリテーション病院・橋本明

31

31

31

神戸百貨店会だより／有馬辰時記

32

32

32

猫じゅらし／佐藤晴美

33

33

33

モダンカルチャーナル／ボケットジャーナル

34

34

34

伊藤ルミの美男対談／神戸商船大学教授・井上和雄

35

35

35

連載小説／「靴」／西本衣江・カット・犬童徹

36

36

36

神戸新報／カメラ・小山保

37

37

37

赤根和生・松原政祐／文・赤根和生・松原政祐

38

38

38

新井満吉・新井善一／新井満芥川賞受賞を祝う会

39

39

39

新井善一／文・新井満吉

40

40

40

新井善一／文・新井満吉

41

41

41

新井善一／文・新井満吉

42

42

42

新井善一／文・新井満吉

43

43

43

新井善一／文・新井満吉

44

44

44

新井善一／文・新井満吉

45

45

45

新井善一／文・新井満吉

46

46

46

新井善一／文・新井満吉

47

47

47

新井善一／文・新井満吉

48

48

48

新井善一／文・新井満吉

49

49

49

新井善一／文・新井満吉

50

50

50

新井善一／文・新井満吉

51

51

51

新井善一／文・新井満吉

52

52

52

新井善一／文・新井満吉

53

53

53

新井善一／文・新井満吉

54

54

54

新井善一／文・新井満吉

55

55

55

新井善一／文・新井満吉

56

56

56

新井善一／文・新井満吉

57

57

57

新井善一／文・新井満吉

58

58

58

新井善一／文・新井満吉

59

59

59

新井善一／文・新井満吉

60

60

60

新井善一／文・新井満吉

61

61

61

新井善一／文・新井満吉

62

62

62

新井善一／文・新井満吉

63

63

63

新井善一／文・新井満吉

64

64

64

新井善一／文・新井満吉

65

65

65

新井善一／文・新井満吉

66

66

66

新井善一／文・新井満吉

67

67

67

新井善一／文・新井満吉

68

68

68

新井善一／文・新井満吉

69

69

69

新井善一／文・新井満吉

70

70

70

新井善一／文・新井満吉

71

71

71

新井善一／文・新井満吉

72

72

72

新井善一／文・新井満吉

73

73

73

新井善一／文・新井満吉

74

74

74

新井善一／文・新井満吉

75

75

75

新井善一／文・新井満吉

76

76

76

新井善一／文・新井満吉

77

77

77

新井善一／文・新井満吉

78

78

’89NHK大河ドラマ「春日の局」の放映を前に生誕地から贈る!

丹波の秘釀酒
リキューール



大 / 2000円
小 / 1300円



梅の下 お福遊びし 石今も 梶庵子

丹波。春日町の大梅山「興禪寺」は、春日局の出生地。幼い頃のお福が遊んだ庭や石が、今も「お福石」と呼ばれて遺っています。

明智光秀の重臣斉藤内蔵助のむすめお福は、三代将軍家光の乳母春日局として、その養育のために大奥の中で強く生きぬき、家光は徳川幕府の礎となりました。丹波の山里の霧に育まれ、夜露にぬれた落葉の中から拾い集めた栗の実、梅の実を原料に、母のように暖かく甘く、そして酸味のある愛のこころが、「秘釀酒・春日の壺音」の香りと味わいの中にしつとりとひろがります。

若竹のまこと静かや その生地 梶庵子

秘釀酒「春日の壺音」

一、命名

(藤市計画・建築家) 水谷

類介

一、書

(書家) 望月 美佐

一、壺

(陶芸家) 市野 弘之

(名) 西山酒造場

兵庫県氷上郡市島町中竹田一七一
電話(0795)86-0331(代)

FASHION PARK

ファッション・パークが変わる。

10月29日(土)
グランド・オープン

F·A·P

さんプラザ2F,3F・センター・プラザ3F
PHONE 078-391-6861

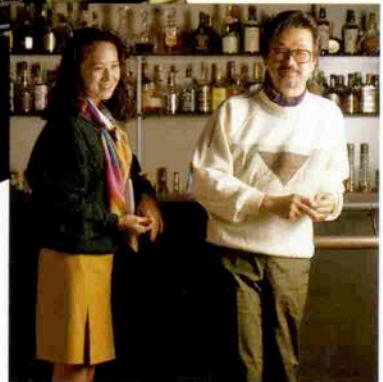


こんな日には

DOLCE

ドルチェ・ジオスポーツ

皮ブルゾン	¥130,000	¥98,000
セーター	¥ 29,000	¥17,000
パンツ	¥ 17,000	
スカート	¥ 17,900	



 **MAC**
SINCE 1895 KOBE

本部/中央区三宮町1丁目6-22(ニューセンター7F) (078) 392-1651

三宮本店/三宮センター街 (078) 391-0895

ブレザーショップ/トアロード (078) 391-0896

ドルチェマック/三宮センター街 (078) 332-0141

京都店/藤井大丸2F

姫路店/FESTA 2, 3F

宝塚店/宝塚南口サンビオラ3F (0797) 71-4830

モデル:山本憲徳、山本なおみ

☆私の意見

21世紀に向けて 国際的な ブランド育成を

嘉本 祢夫

△神戸市農政局長△



神戸は国際港湾都市というイメージが定着していますが、実際には市域の12%、約6千ヘクタールを農地が占めています。昨今日本の農業は国際化に伴って、貿易の自由化や食管会計制度の改革のために、縮少再生産の方に向にあるわけですが、神戸市の場合は農業及び漁業におきましても、拡大再生産に向かっています。つまり規模が大きく意欲的な農業、漁業が展開されているわけです。

農業におきましては、水稻、畜産、園芸という三部門が、大変バランスよく発達しています。そのため第一に、市民の方々に新鮮で安全な、品質の良い生産物の供給が可能となっています。第二に、農業が盛んであることで、大都市神戸の自然環境の保全と、アメニティの向上に寄与しています。花時計の花や、フラワーロードの花は、市域で生産したものをお供給しています。さらに、農業地帯に観光農業といいますか、市民の憩いと安らぎの場が提供できます。現在、六甲山牧場、海釣り公園、農業公園などがあります。また最近の消費者は、本物志向であり健康志向でもありますので、例えばワイン専用の、品質の良いブドウの育成に努めていますし、あるいは畜産を振興して、そこから生まれる有機肥料、堆肥を使って、化学肥料を使用せずに園芸生産物を作るなど、市民に支えられた農業、漁業を推進していきたいと思います。

今後は、前に申し上げたように、貿易自由化の波が押し寄せてきていますので、国際的に通用するブランド商品を育成していく必要があります。私どもはワイン、チーズ、ビーフ、ウォーターなどを、そういう国際化に耐えうる商品に育て上げていきたいと考えています。尚御存知のように、神戸ワインはEC12カ国の世界品評会で金賞を受賞しましたので、一人前になりつつあるといえます。

神戸市は大都市の中では、農業、漁業の自然的条件に恵まれていますので、それを21世紀に向けてどう生かしていくかが、私どもの使命であると思います。

こんにちは赤ちゃん



大神正輝くん／西宮市深谷町
「はだかでゴメンナサイ…」

完全看護★冷暖房完備★病院前公共駐車場有

芦屋 柿沼産婦人科



芦屋市大枡町1番18号
芦屋保健所東隣
☎ 芦屋 (079) 31-1234 代表

お菓子のとても
美味しい季節です



スモールバウムクーヘン

8ヶ入……¥1,000

12ヶ入……¥1,500

16ヶ入……¥2,000

—北欧の銘菓—

ユーハイム・コンフェクト

隨想三題 ドイツの旅

石川 晴久



今、日本は円高で海外旅行がさも国内の九州・北海道へ旅行するのと同じように盛んであります。そういう私も、御多分にもれず、昨年ドイツ・オランダの俗にいう「ロマンチック街道」のツアーに参加し、旅して来ました。

小グループでの旅でゆったりしました。所謂、買物ツアーではなく、朝ゆづくりの出発であわてることなくのんびりした旅でした。

季節は5月でちょうど日本と同じような気候でしたのでさわやかで、樹々の新芽が出かかったところでも私のような風景作家にとっても絵になる構図で、一日中ステッキに走りまわっていました。

ドイツ（ヨーロッパ）の5月は、夏時間に入り、夜8時頃まで昼間のように明るく、その点においてもスケッチするのに大変よかったです。

ドイツの「ハイデルベルク」という街では、どの建物、風景も絵になるモチーフばかりで、小さな

細い路地へちょっと入ると、そこには素朴な教会が、民家が、小屋が、ぽつんとあり、静けさと、寂しさで私の胸をいっぱいにさせてくれました。壁も、窓も、扉も古ぼけて何回もペンキをぬりなおしてあるようでした。でもあたりの景観をこわさない心を大切にしていることが、私にはよくわかりました。街中のメインストレーリーをぬける所に強大な物すごい教会「ハイリッヒガイスト（聖靈）教会」がありました。ものの本によりますと、「プロアルツ選帝侯

国の中で最も高いゴシック建築の聖堂で」と書かれています。この教会の外観は、絵のモチーフとしてあらゆる角度から描くことができ、高くそびえる塔だけでも絵になります。たくさんのスケッチをしました。

次に訪れた

「ローテンブルク」



スケッチ/石川晴久

では、聖ヤコブ教会（ローテンブルクの主教会）が印象に残りました。（絵を描く上で）この教会もゴシック教会で百年以上の建築年数を要し、潔められたのは、1448年である」とこれももの本に書かれていました。上下に細長い窓をもつ端正な教会でした。期間が短かったのですが、私の初めてのヨーロッパの旅、私なりに大きな意味をなしたように思います。今、私は、その時のスケッチをもとに私なりの教会、建物、風景を時間をかけてキャンバスにむかって制作しているところです。

隨想三題 白い山に憑かれて

川口 陽之

（郷土史家）



一昨年、フランス語の「白い山」アルプスの最高峰四千八百峰のモンブランに登った。昨年はサンスクリット語の「白い山」ヒマラヤのダウラギリのトレッキングを楽しんだ。今年の正月はスワヒリ語の「白い山」アフリカの最高峰六千峰のキリマンジャロに挑戦した。麓から山小屋泊りの四日目の標高四千五百峰で雪になった。赤道直下の雪！早速食べてみる。モンブランの雪、ヒマラヤの雪。みんな食べた。四千八百峰の山小屋で、同行の青年は高山病で意識不明の重体。下山し入院させることにして、午前一時に小屋を出発した。明るくなると、倒れている人が多い。高山病である。最年長の私はそのカケラも感じない。午前六時頂上直下の肩に出た。休まずそのまま五十峰ほどの岩峰を攀じり頂上に立った。メンバーは誰も到着していない。六十二歳の私が一番乗りである！三十分後に同行八人が登攀してきた。私とリーダー以外は全員が高山病にやられていたのである。



キリマンジャロに一番乗りした筆者（中央）
周囲はアメリカ美人とガイド、後方は氷河

この八月、旧満洲と朝鮮の最高峰二千七百峰の「白い山」白頭山（中国名長白山）に行ってきた。

長春（旧新京）から、摂氏40度下十五時間の無冷房のS-L夜行で延吉に着き、無冷房のバス九時間で、やっと長白漠布下の標高千七百峰の涼しい山小屋に着いた。この旅程の厳しさにはマイツタ。翌日はこの漠布に登り、小屋に戻つて、白頭山の二千六百峰の天文峰に行くことになった。二千四百峰

引退して山歩きばかりしていると「健康によいですねー」とよく言われる。冗談じゃない。私は七十歳までに肉体を使い切り、早くボッククリ死にたいために山登りをしているのである。山で、大好きなビールと爽快なタバコを存分にやつて、肝臓か、肺癌になるための山歩きである。子育てが終わって「美」から見放されたオイボレは中風やボケにならず、早く死ぬことに全精力を使うべきである。これが「善」であり、「真」である。

の気象台まではジープ。登攀高度は二百峰だけ、私はスイスイ。やはり一番乗り！ここから見る火口湖「白頭山天池」は神秘そのもの。愛新覺羅の始祖降臨の伝説もうなづけた。翌日、長白漠布下流の「地下森林」に日本人で初めて入ったことは、神戸新聞に報道された。水流は岩盤のクレバスの地下に潜っている。この不気味な崖地がエゾマツなどの林になつてるので地下森林と呼んでいるのである。

大好きな神戸で、新しい出発

立原

麻衣



このたびは、第三回短歌現代新人賞をいただき、思いもかけない

貴重な体験をさせていただきまし

た。

今回のがなければ恐らく一生行くことのなかつたであろう

東京へ行き、午後四時よりの中野サンプラザの受賞式会場では金屏風を背にして坐り、選考委員その他の方々の感想を賜り、カメラのフラッシュの光るなか石黒社長より賞状等を授与され、また、結社の東京在住の方々より花束もいた

だき本当に夢の中そのもの、自分

の身に現に受けていることは信じ難い思いのうちに時が過ぎてい

きました。

午後八時よりの「歌人夏の集い」でも新人として紹介され、短歌誌等に名前や写真のいつも載つてゐる近藤芳美氏、中野菊夫氏、藤田さくら子氏など、またテレビ

き子氏には親切なお言葉もかけていただきました。三百五十人の著

名歌人の集い合う前で、たどたどしい挨拶をしたのちによく緊



「歌人夏の集い」にて筆者（左から3人め）、
馬場あき子さん（右から2人め）

張のほぐれる思いが致しました。

日頃、仕事の合間には山ばかり

歩いている私にとってあまり興味

のなかつた東京も、この機会を逃

しては再び訪れることもないだろ

うと無理を言って案内して頂いた新宿の夜の高層ビルより見晴るかす百八十度の展望はすばらしいものでした。色とりどりにどこまでも続く光の海の遙かに東京タワーの燈が見え、海も山もなく街の燈がそのまま空の星へと紛れてゆく

のも雄大で深いものを感じさせられました。昼間見た美しいビル群の印象と共に、東京に対するイメージが少し変わりました。

今回の受賞について、短歌を通じて知り合った友人たちや文学歴史の会の仲間たち、そして、毎月

近郊の山を歩き一年に一度はアル

プス登山をし、苦しみも喜びも共

に分かち合い山の湯では背中を流

し合うまでの登山の仲間たち、と

大勢の先輩や友人達より心からの

祝福をいただきました。

いつまでも途切れる事のない人

生の山坂を越えてここまで辿り着くことができたのも、心温かい人

たちに巡り会えたおかげと感謝し

ています。

生まれ故郷よりも馴染み深い地

となつた大好きな神戸で、短歌への新しい出発ができるこことを幸せに思います。

十二月には去年に続き二度目の

六甲縦走を果たそうと心優しくも

たくましい友人を頼りに足を鍛え

ているこの頃です。

生まれ故郷よりも馴染み深い地となつた大好きな神戸で、短歌への新しい出発ができるこことを幸せに思います。

十二月には去年に続き二度目の六甲縦走を果たそうと心優しくもたくましい友人を頼りに足を鍛えているこの頃です。

| 33 |

水みわか 分れのまちサミット 丹波水上町につどう

米花 稔（神戸大学名誉教授福山大学教授）

全国一低い中央分水界（海拔九

五米）の水上町、ここ瀬戸内海へ

の加古川と日本海への由良川との

接点において、昭和六三年七月二

九日はじめての試みに、全国の分

水界所在の三〇余の市町村代表が

集まって「川と野と文化を考える

シンポジウム—水分れサミット」

（主催兵庫県、水上町、北摂丹波

祭典実行委員会）を開いた。

この機会にこの町の水分れ橋を

すこし上がった地点に水分れ公園、

また水分れ資料館が設けられ

た。そこに続く数軒の家並みの屋

根は、雨が降ると一方は瀬戸内海

へ、他方は日本海へという不思議

なところもある。日本縦断の分

水界を辿ると、分水界が通過する

市町村七三、分水界が境界の市町

村三二など知られる。



日本一低い中央分水界



「水分れサミット」の模様

上町の農
協会館

で、東大

名譽教授高橋裕氏の基調講演「川
と文化とまちづくり」において、

水の豊かさとその四季変化のはげ
しさへの多様なつきあい方を経験

してきた日本人の生活のちえか
ら、技術の軍目的化し勝ちの今日

の反省、地域に根ざした文化の意
義がのべられた。ついで分水界の

岩手県安代町長伊藤重雄、長野県

横川村町百瀬康、地元水上町長小
林健吉、愛媛県伊予三島市町篠永
善雄、大分県湯布院町長吉村格哉
諸氏から特徴的な地域づくりの事
例発表があった。

これらの諸氏に加えて先年水不足に苦しんだ福岡の西日本銀行取締役緒方世喜子氏、国土庁加藤昭水資源計画課長、近畿地方建設局、県代表も加えて、筆者がコーディネーターとしてパネル討論を行った。

分水界のまちは、峠のまちでもあり、文化の接点としての歴史的意義と共に、現に多くは過疎に苦しむ。自然の豊かさとさびしさへの意欲的とりくみが報告された。あらかじめ準備した分水界市町村全国アンケートでは、伝統産業振興、リゾート開発、イベント実施など多様な回答があつたものの、分水界の特性への認識は必ずしも十分でなく、今回の催しが刺戟になつたようである。

そこでパネラーの市町村長が幹事役となつてこのサミットの今後の発展を申合せ、水分かれの地の自然と歴史を人づくり地域づくりに生かすことを討議の集約とした。

水系文化に心ひかれ続けている筆者としても地道な展開を心から期待したい。小さなまちからのいささかの情報発信もあるから。

実験交流サロン

シアター・ポシェット

10月の公演

- 9日（日）14:00 クラシックサロンコンサート
 15:00 「音舞」 (有料)
 23日（日）14:00 「異人館より愛の調べ」
 チャリティコンサート (有料)
 30日（日）14:30 G・A・F
 フルートアンサンブル (有料)



★シアター利用のご案内

- 曜日、時間 / 土、日曜日（通常）AM10:00～PM8:00
 - 費用 / ホール設備の使用無料。光熱、空調、管理費のみ実費
 - 付帯設備 / グランドピアノ・エレクトーン・録音、音響機器、ミキサー、照明コントローラー、テーブレコーダー、マイク、映写機等
 - お申し込み、お問い合わせ

そごう前センター街東南角、さんちか入口

〒650 神戸市中央区三宮町1丁目5-1 住友銀行ビル6F

佐本小児歯科 佐本進 ☎331-6302～3



ママといつしょに



赤ちゃん
岩倉 豪くん (昭和63.8.19生)
神戸市兵庫区在住
待望の次男誕生!!
ぼくとお兄ちゃんへ――
「お母さんを困らせるなよ」

★佐本産科・婦人科★

佐本 学

神戸市兵庫区中道通4-1-15
☎575-1024(病室☎576-9639)
市バス上沢4停南スグ

詩と神戸

竹中郁と足立巻一

杉山平一

カツト・石阪春生

神戸が、詩人竹中郁を失つて六年、足立巻一を失つて三年になる。

二人は、まさに神戸の人だった。とくに、竹中郁は、その土地・風土を呼吸して生き、神戸の体現者だった。

神戸に詩的なものがあるとしたら、何がしか、竹中郁の呼吸がかっている。

私は幼少のころ、和田岬に住み、西代に移り、東須磨小学校に通つたが、神戸を意識したのは大阪へ移つてからである。イナガキ・タルホ、竹中郁によつて、神戸が童話的な世界に見えた。乗物の好きな私は、日本一といわれた神戸市電をたのんだ。どこかの市電よりも窓が大きかった。

戦中の灯火管制のなか、ある月夜の晩、市電で栄町を走つたが、町も電車の中も灯を消し、窓の外をただ月光の青一色に染まる町が流れるのが、まるで海底のなかを走つているように見えた陶酔感を、いまだに忘れないでいる。イナガキ・タルホの「星を拾つた話」などの生まれる町だった。また元町の角のラジレイロで、コーヒーを飲

んでいると、小説「旅の絵」で、堀辰雄が竹中郁と待ち会せたコーヒーハウスの感じに浸ることができた。その小説の中で、堀辰雄は、竹中郁に教えられて中山手の「ホテル・エソワイアン」に一夜をすごすのだが、このホテルのことが、竹中郁の「私のびっくり箱」(足立巻一編)に出てきてなつかしかつた。生田神社裏の「ふじい」というレストランの開店祝に招かれて、ここがそのホテルのあとではないかとさくと、藤井夫人が「イソヤンはうちの貸家でしてん」といわれたという。エソワイヤンでなく、イソヤンか、と私もびっくりした。

淀川長治氏が、近年自伝でしきりに神戸を語るが、そのお姉さんが「べっぴんさん」であったと竹中郁はこの本にしきりに書いているが、竹中さんとの神戸の町の案内は実にくわしかつた。「神戸っ子」の文学賞の選考のとき、帰りに、北野の異人館の町づくりを案内してもらつた。うろこの家を異人館に仕立てたいきさつから、一つ一つの家の住人のことや、ここが小磯良平の家のあつたとこ

ろなどと、観光案内の裏ばなしらが珍しかった。そして、会員でないと入れないという、へちまクラブのニシムラコーヒー店へ連れて行ってもらつた。

こういう日常の随想をまとめた「私のびっくり箱」はまさに神戸を語つて自分を語る一冊だが、それをまとめたのが足立巣一さんだった。その詩

足立さんは、神戸という風土の血を同じくする竹中郁を、自分として愛しみ、敬愛したのである。二人に通じ合うものは、そのあたたかい心だった。

足立さんに会う人は、みな、その春風のような温度に接したし、その誠実は、人の心に染みている。

夕暮れ忌という、足立さんを偲ぶ会が、三年目にお百二十名の人が集うのが、その人柄を示していた。

その誠実と、あたたかい心のあらわし方は足立さんと竹中さんはちがっていた。

竹中さんは、感性の軟かい二十四歳のときフランスに留学、二年滞歐したことから、西欧合理主義を身につけていた。

人柄も相まって率直だった。電車の中でタバコを吸う人をたしなめたり、路上でボール投げする子を叱つたりした。

そして送られてくる詩集に、札を書く場合、お世辞でなく、必ず一筆、欠点を指摘した。竹中さんに「叱られた」「くさされた」という詩人は多い。また、奥様が病気のとき、「お見舞いにも参りませんで」と挨拶する人に、「来る気もないくせに、いい加減なこといなさんな」といったり、訪問にお菓子を持って行って、こんなセンスのないもの持つてくるより手ぶらの方がよろしい、と、詩のセンスを叱られたり、散々な目にあつた、という詩人がいる。まやかし、ごまかしだを嫌つた詩人の面目は、いつも躍如としていた。それは、誠実のあらわれだった。

足立、竹中の誠実が、年を経て、人々の胸に、はつきりしてくる。



論、美術論を「消え行く幻燈」にまとめ、随想を「巴里のてがみ」「私のびっくり箱」にまとめ、その費用も自分で調達して出版、その上に綿密な評伝を書いた。

その思い入れ、肩入れは、近年、その比を見ないものだった。

□ トランペット片手にブラジル一人歩き(13)

忘れ得ぬオランダ人 バート。

絵と文・右近 雅夫
(在ブラジル・サンパウロ)



一九六九年暮の事だった。アミゴのフェルナンドが突然僕に“São Paulo Dixieland Band”的トランペット奏者になつてくれないかと言つて来た。当時、僕は自作のマジック・インクで絵を描くのに熱中し、フォーリヤ新聞社のガレリーで一寸した画家気取りで個展をやつたりし、トランペットの方はもう一年近くも吹いていなかつた。

新しいバンド・リーダーとして紹介されたピアニストの Bart Van der Scheer は度のきつい黒ぶちの眼鏡をかけた大男だった。「コンピューターの技師で一ヶ月前にブラジルに移住して來たんやけど、オランダで学生時代からデキシーやってたんや…。」とたどたどしいポルトガル語で彼は自己紹介した。最初の中、僕とバートとは気が合はず、双方で好かんたらしい奴やと思つていたのである。練習が始まるとしょっちゅうトランペットを起こし、その都度フェルナンドが仲介に入らねばならなかつた。然し、バートのアレンジした“Limehouse Blues”的演奏が御機嫌な出来で、その時以来僕と彼はお互の才能を認め、尊敬し合うようになつた。

オランダ人にはデキシーの好きな連中が多く、バートの顔で当時僕等のバンドはサンパウロのオランダ人のフェスターには必ず招待されて演奏したものだ。オランデースのパーティで一風変つてるのは、ディナーを終えてダンスが始まると、しばらくしてリーダー格が突然椅子の上に立ち上り音楽をトップさせてオランダ語の演説を長々と始めるのである。バートがその役をかつて出たことが多かつたが、すべてオランダ語なので僕等は何を言つてはいるのかチンパンカンパンであった。其の後はプレゼントの交換をしたり、オランダの国歌を合唱し、再びデキシーで夜が更ける迄踊りまくるのである。

バートには Yoka という名のチャーミングな奥さんと四人の小さな子供があり、サント・アマーロ区の小ぢんまりした家に住んで居た。ある時、やはりオランダ人で一時僕等のバンドでベースを弾いていた Bob が突然帰国する事になり、皆で演奏をテープにとるためバートの家に集まつた。ところが録音の最中に客間に入つて來た彼の飼い犬のシェバードがシンバルをひっくり返し、吃つ



くりして泣き出した末っ子の赤ん坊をヨーカ夫人があわてて台所の方へ連れ出すというハプニングが起きた。数年前、神戸デキシーランド・ジャズ協会から僕の訪日を記念して一枚のLPが発売されたが、B面の“Buddy Bolden Blues”に赤ん坊の泣き声ややまなところにシンバルの音が入っているのがその時の録音で、レコードデングを終えるなりボップが空港に駆けつけたので、とり直しが出来なかつたのである。

バンドは、その当時からサンパウロのジャズの殿堂「Opus 2004」に毎ウイーク・エンド出演していた。ある時、僕がステージの合間にバールに息抜きに行くと、バートが一人でセルヴェージャ（ブルジル語でビールの事）のカップとウオッカのグラスを前に置いてチャンポンで飲んでいた。大の酒豪で人前で絶対に酔っぱらった事のない彼だが、段々目に見えて飲酒量が増えて来たようだった。何を思ったのかその時彼は、「マサヲ俺ワオ前ヲ気ニ入ッタヨ……。」とボツツリ言つたが、

それが彼の最後の言葉になるとは夢にも思わなかつた。仕事を休んだ事の無い彼が翌週来ないので不審に思つてはいるが、突然急病で倒れ全身不調になつたので、家族の人達がオランダで治療させるよう、急拠連れ帰つてしまつた事を知らされた。

それから二年ばかり経ち、オランダから一通の手紙が届いた。身体障害者用に特別に考案されたタイプで打たれた手紙には、ポルトガル語の公証

翻訳人の國家試験をパスし、自分で家族を養つて行く自信を得たので、オランダ政府からの社会補助金を辞退するんだと書いてあつた。首から下が全身不適で車椅子の生活だが、病気の事に就いては一言もふれていなかつた。その翌年彼から受け取つた手紙を読んで僕等は大変なショックを受けた。付添いの看護婦と結婚するため、ヨーカ夫人と離婚したという事が書いてあつた。「ヨーカ夫人を愛するが故、彼女に自由を与えようとパートが取つた措置に違ひない。」とその夜僕は家内のマリアに話した。

美

術夜話 ▲4▼

偉大な松方幸次郎翁と私

創立70周年を迎えた若木屋美術店
佐藤 廉
(若木屋美術店・元町画廊店)

K O B E E



▲松方幸次郎氏肖像（部分）
ブランギン作（個人蔵）

現在の若木屋・元町画廊・新装開店（昭和43年）。創始者である父・隆三の親友だった文化勲章受賞者、林武先生（右から4人目）も来店された。看板の文字は林先生の手による。左から3人が筆者（46歳）。

発展の要素の中には、西洋の近代文化に接することによって青年たちに対する啓蒙と啓示を与えるという、松方さんの文化的思想による力が大きく影響したと言つても過言ではない。この松方コレクションの持つ文化的意義の全てを包含して考察し、神戸市制100年の文化的催として「松方コレクション展」を取り上げたことは、時期を得て大変賢明である。過去から現在、未来に向つて進む現代の若き人たちにとって、温故知新、大いに文化的示唆を与えることであろう。

最近、ヴァン・ゴッホ「ひまわり」一点が56億円で輸

来年'89、神戸市制100年を記念して「松方コレクション展」が開催される。国際港都・ファッショントリニティ神戸の文化に大きな貢献をし、功績を残した神戸と大変関係の深い松方幸次郎翁が、大正5年から昭和初期に「川崎重工業」の社長をしておられた十数年間に渡り収集した世界的な美術品は、一個人のコレクターとしては、過去から現代に通じて世界最大のコレクションであり、未だにその記録は破られていない。その「松方コレクション」の一部を神戸市主催で開催することは、今日の神戸っ子として文化的な誇りである。松方さんはまた、創刊90周年を迎えた神戸新聞社の初代社長であり、神戸の文化的



▲父・若木屋創始者・佐藤隆三



▲祖父・佐藤成教



▶右から、筆者、林先生、次女

祝子・長男成美（オープニングの日）

入され、日本中を驚かしたことはよく御存知のことであるが、その何倍世界的に有名なヴァン・ゴッホの名作「アルルの寝室」を始め、モネ、ルノアール、ドガ、ホーリッスラー、シスレー、ロートレック、又、初期ピカソ等々の絵画の鉛品、彫刻ではロダンの「地獄門」「考えら人」等の名作の数々、戦後フランスのドゴール大統領が門外不出と言っていた世界的名作17点を、日本政府に西洋美術館を建設することを交換条件で返還に応じたが、これらも全部が松方さんのコレクションの一部であった。その他、松方さんが日本に買戻した浮世絵7千点（現在東京博物館蔵）等、このコレクションに関する専門的なことは膨大な記録と資料があり、専門家が一生の研究テーマとするほどの価値がある。その一節は本展開催のカタログ等にお任せすることにして、次に「人間・松方さん」と親しく身近に接した私たちのことを、この際記念として記録しておきたいと思う。

私が初めて松方幸次郎さんにお目にかかったのは昭和の初めである。当時松方さんは須磨に住んでおられて、風呂が大変お好きで、毎日のように須磨温泉の朝風呂に行かれ、その帰りに『若木屋』（後述）に寄られた。いつも水戸黄門と同じ竹の杖をつき、着物姿で、それも下着は何もつけず、スッントンとあった。幼ない私などちょうど下から見上げることになって、『振り』の大きいのに驚いたのは今でも鮮明に思い出す。つい最近、このことを当時の番頭をしていた者が現在80歳で健在で、この話を確かめたが、その意に介さない豪放磊落な人柄を語り、私の記憶通りだった。今では実際に神戸で松方さんには会った人は数少ないと思われるが、その不思議な御縁についてもう少し話してみたい。このことは本年創立70周年を迎える『若木屋美術店』の年史に重要であり、父が大正7年に美術商を創立し、当時創成期にあった画商になったが、今で言う脱サラである。それまで父は、神戸一中を卒業後、川崎重工の潜水艦設計部に勤務して

いて、その時の社長が松方さんであった。

父は大変我儘な社員であつたらしく、それというのも、私の祖父佐藤成教が帝大出の日本で二番目の工学士で、明治時代に「佐藤組」という土木事業を営み、神戸市中央区中山手の相乐园の前に居を構え（その邸も後に川崎家に譲る）。二頭馬車に乗つて羽振りをきかせていました。兵庫県だけでも神戸を中心に山陽線の神戸～須磨間に鉄道敷設、布引貯水池の工事、神有電車三木線の敷設、岸和田の築工、国鉄三田線の敷設、他県では軽井沢に至るアパート式トンネル、京都のインクライン疎水工事、岡山の三石のトンネル、又、外国では、大連に当時東洋一高いと言われた煉瓦造りの煙突等、大きな事業を残している。大変偉くて、私には恐い存在であつたが、後年、今の韓国の仁川で、佐藤農園を始め、日露戦争などで事業が失速するに従いその農園を川崎家に譲渡し、川崎農園と呼ばれるようになつた。そんな関係で、父は川重ではよほど自由に振舞われたようで、その当時京都画壇の重鎮、竹内栖鳳先生の門下で新進作家として売り出し中の私の伯父日本画家森月城が、須磨に若くして邸宅を構えていて、その作品を、父は社長と親しいのをよいくことに会社の重役に売りつけたりしてこずかい稼ぎをしていたのが昂じて大正7年、美術商としての生業の道に入るきっかけとなつたのである。その当時大正10年頃、今も社会史に残る恐慌時代であり、米の焼き打ち事件等、大変ぶつそうな時代で松方さんも川崎重工争議で苦労されたのもこの時期であった。しかし父は運良く画商に転向し、微々たるものであつても自分の好きな道に邁進しつつあつた。父が美術商として十数年を迎えた頃、松方さんは、又々非常な御恩を受けることになつたのである。

松方幸次郎さんは御存知の通り三田の殿様九鬼家の親戚であるが、その九鬼家の膨大な別荘が須磨の千守川の西側の土手に沿つて広がつており、その北隣に柳瀬さん（土佐海運の豪商で千守幼稚園と教会を経営）のお屋敷

があり、その斜交向いに千守川を隔てた東の土手に沿つて、数寄屋的瀟洒な美庭のある御屋敷が松方さんの住んでおられた所である。前述のように、このお宅から裏道伝いに私の店まで直線で100mもなくその途中に須磨温泉があつた。その当時に松方さんから父に大きな幸運が持たらされたのである。それは、松方さん所有の古美術骨董品・絵画の処分を父が任されたのである。その美術品の数々は、今も私の記憶に残る重文級の土佐光起の六曲屏風を始め、宮家御下賜の蒔絵類、玉で造つてある花瓶・香炉等々、目も覚めるような逸品揃いであつた。そのコレクションを父は大阪美術俱楽部で二回に渡つて売り立てをした。昭和12、13年頃のことであるが、当時で売り上げ高が約金五万円であった。今であれば膨大な金額である。その大きな仕事のおかげで、父は若木屋美術店を今までの倍の大きさに改造改装し、父自慢の店先に茶室まで持つ美術店ができあがつたのである。私が大阪の高麗橋の古美術商「児島商店」に丁稚奉公に出ていた時で帰宅してびっくりしたこと覚えていてる。

神戸の偉大なる松方幸次郎翁を取り巻く人間の輪廻の不思議を私は強く感じている。来年神戸市制100年を迎える国際港都神戸の文化を記念する「松方コレクション展」又それを記念事業として共催される神戸新聞社の創刊90周年、そして創立71周年を迎える「若木屋美術店（元町画廊）と、記念すべき年になる99年の全ての成功を、心から祈念して本文を綴つた次第である。本文記載を勧めてくれた神戸っ子の小泉家が、その当時須磨（今の水族園付近）で「以津金」という良き料亭を営んでいた。ここで私の父は画会を催しており、私も再々連れて行かれた。須磨時代にはいろいろのことが絡んでくるから大変不思議である。当店が来年開催する「松方コレクション展」のお手伝いをさせていただくことになつたことも合せて、奇縁を感じずにはいられない。いつかまたの機会に「神戸文化の源は須磨文化」のタイトルで記述することがあればおもしろいかもしない。